

研究ノート 高橋秀雄考古コレクションの土器について

4.1 はじめに

本会誌第 16 号において、七飯町歴史館で所蔵している「高橋秀雄考古資料コレクション（以下、高橋コレクション）」について、その概要を示し、その中から聖山式土器に伴うと考えられる方形区画を持つ土器について紹介した。

一方で、昭和 20 年代に表面採集により蒐集したと考えられるこれら高橋コレクションは、発掘調査報告書も存在せず、実測図もないため、展示活動などで活用する以外に、その存在を紹介する機会がなかったのが実情であった。中には、造形的にも秀逸なものや、個性的な文様をもつ土器もある為、実測図を作製し広く発信することを目的に、この紙上で資料紹介をさせてもらえればと思う。

4.2 大中山 3 遺跡出土壺形土器

高橋コレクションの土器には、大中山 3 遺跡（図 4.1 参照）から出土したものがある。この壺形土器（図 4.2・4.3）のほか図 4.4・4.5、図 4.6・4.7 に示した土器も同様である。



図 4.1 遺跡位置図

1949 年（昭和 24 年）11 月 5 日に採集された、高さ 8.3 cm、径 10.5 cm の完形の壺形土器（図 4.2・4.3）である。底部は水平だが、胴部から口縁部にかけて歪みがみられ、傾いた形状となっている。ほぼ完形であることから、収集後の接合の甘さによる歪みではなく、土器製作時にすでに歪んだ状態だったと想像され、焼成後も、この状態で使用されていたと考えられる。多少の歪みは気にせずに使う大らかさや、人間の適当な部分を想起させる土器だと思う。時期については、縄文時代晩期後葉大洞 C2～A 式相当と考える。

頸部から緩やかに外反する口縁は平縁で、頸部は縦方向に弱い磨きが認められる無文となり、頸部の立ち上がりとは最大径となる胴部に、それぞれ 2 条 1 組の沈線を一巡させ、体部文様帯を作り出している。さらに頸部の 2 条の沈線のうち下部の沈線に、並列する浅い沈線を重ねることで、やや幅広の無文部とし、そこに 2 個 1 組の刺突を施している。この刺突は B 状突起を簡略表現したものと考えることができよう。

体部は沈線による入組文、工字文、三叉文を組み合わせ、LR 原体によって施された地文を削るようにして文様を浮き立たせている。これらのモチーフの組み合わせには連続性や規則性が見られず、横位に配されていることから、同時期の聖山 I 式、II 式の変遷を考えるうえでも、参考となる土器である。底部の立ち上がり付近にも 2 条 1 組の沈線が巡る。

4.3 大中山 3 遺跡出土鉢形土器

1951 年（昭和 26 年）11 月 10 日に採集された、高さ 7.0 cm、径 10.3 cm の鉢形土器である（図 4.4・4.5）。

やや外反する口縁部は平縁で、その下にやや幅広で浅い横走沈線を縦位に 3 条連続させた無文の頸部となっている。また頸部には B 状突起を配し、それぞれを沈線で繋ぎ、B 状突起の直下と底部の立ち上がり付近に、それぞれ横走す

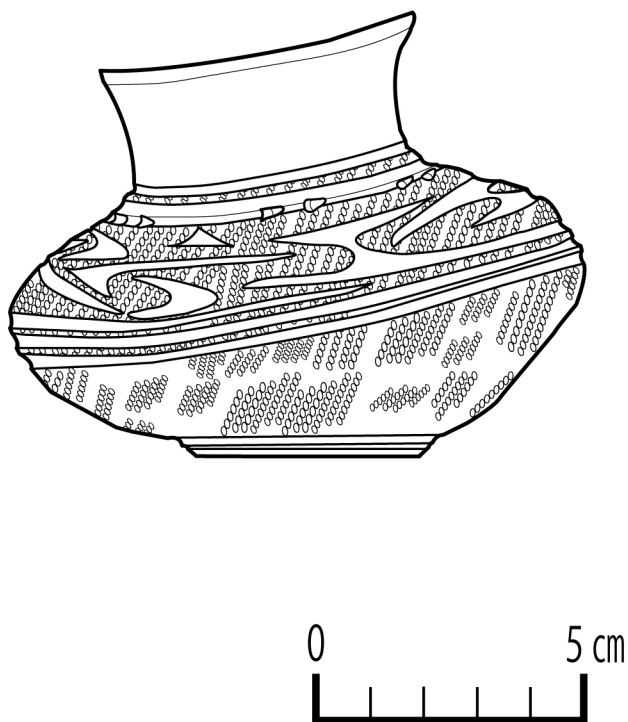


図 4.2 壺形土器（大中山3遺跡出土）



図 4.3 壺形土器（大中山3遺跡出土）

る1条の沈線を巡らせ、その間を体部文様帯として区画している。

体部文様はRL原体で地文を施し、上下2段となるように横位に入組文を配しており、上下の入組文が繋がることはない。また入組文はRL原体による地文に沈線を数条、並列気味に重ねて施文することで、幅広の沈線となるよう描いている。また、器面内外に炭化物の付着が認められるた

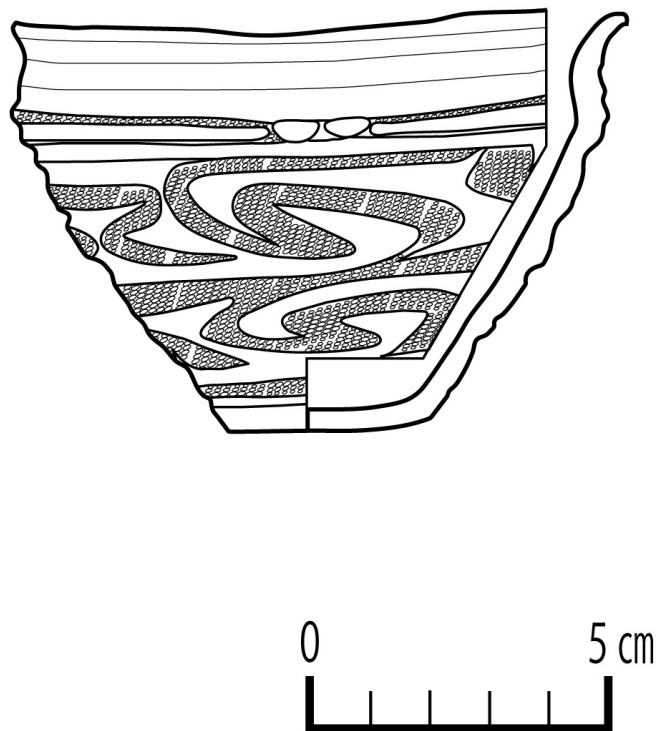


図 4.4 鉢形土器（大中山3遺跡出土）



図 4.5 鉢形土器（大中山3遺跡出土）

め、実用品として使用されていたと推測する。時期は、縄文時代晩期後葉大洞 C2～A 式相当と考える。

4.4 大中山3遺跡出土四脚付皿形土器

1949年（昭和24年）1■（ラベルの破れにより判読不能、10～12月と思われる）月5日に採集された高さ7.5cm、径19.7cmの皿形土器で、底面に4本の脚部が付く風変わりな器形となっている（図4.6・4.7）。類例を調査しているが、今のところ見つからないので、もし知る方がいたらご教示を願いたい。

文様は全体的に無文で、皿部は内外ともに板状の工具で横方向にナデ痕が、脚部は縦方向にナデ痕が見られる。皿部には輪積み痕と思われる痕跡が認められ、脚部の1本には煤が付着している（図4.6、黒色の塗りつぶし部分）。赤色顔料の痕跡もなく、胎土には砂の混入があるため、若干粗い造りの印象がある。4本の脚部のうち1本は蒐集後に復元したものであるが、皿の底部からほかの3本と同じように脚が付されている痕跡が認められるので、製作の段階で確実に四脚を意識して製作したものである。七飯町聖山遺跡で出土した晩期の小型壺形土器（図4.10）には、四脚を想起させる突起が底部に付されているが、ここまで脚部が長いものも珍しい。時期については、出土遺跡の主体が縄文時代晩期であることと、皿部の器形から縄文時代晩期に相当すると考える。

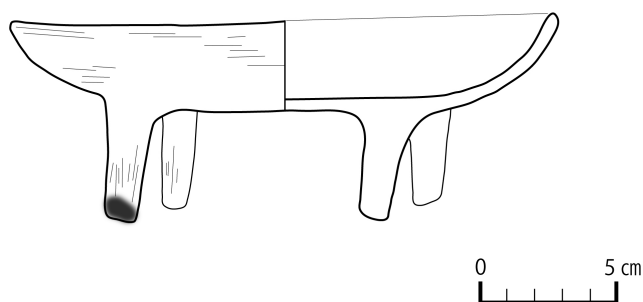


図 4.6 四脚付皿形土器（大中山3遺跡出土）



図 4.7 四脚付皿形土器

4.5 大中山地区出土の浅鉢形土器

1952年（昭和27年）4月5日に採集された高さ15.5cm、径25cmの浅鉢形土器である（図4.8・4.9）。「亀田郡七飯村

大中山高橋初男畑採集」との記録はあるが、「七飯町史」や包蔵地台帳と照らし合わせても、該当する記載がなかったため、出土遺跡の特定には至らなかったことから、広義で大中山地区出土とした。

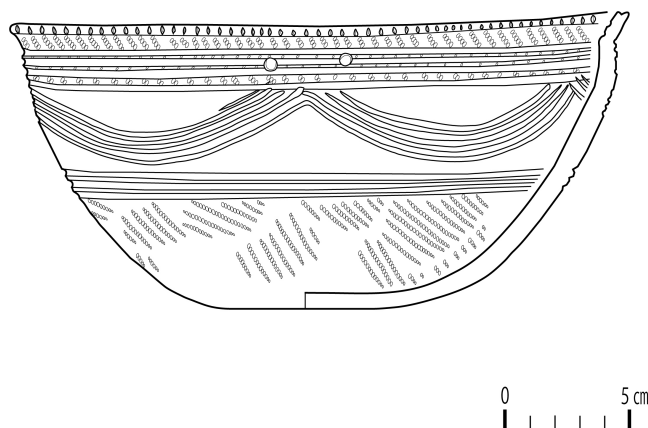


図 4.8 浅鉢形土器（大中山地区出土）



図 4.9 浅鉢形土器（大中山地区出土）

口縁部が最大径となり底部にかけて緩やかにカーブするボウル状を呈している。口縁は頸部から弱く外反し、口唇に垂直ないしは右方向から突いたと思われる刻みが施され、口唇部内側には2条1組の沈線が一巡する。

頸部は4条1組の沈線を一巡、さらに胴部にも3条1組の沈線を一巡させ、両沈線の間を体部文様帯として区画し、そこへ4条1組の弧状沈線を波状となるように描いている。この波状沈線は、基本的に弧状のつなぎ合わせで構成されているが、部分的に一筆書きのような部分も見られることから、結果として波状をモチーフとするように意識したものと考えられる。

器体表面の全体にミガキが認められるため、RL原体によって施された地文が、やや潰れた状態となっている。これは当該期における器面調整の特徴と考える。また4条1

組となる沈線の重なり具合から推測するに、まず文様帯内の波状沈線を描き、頸部と胴部の横走沈線を施して区画化、文様帯の上下に地文を施し、最終的に器表面のミガキを施すといった順で製作したと推測する。

補修孔が2か所見られるが、粘土のめくれ上がりが認められることから、焼成前に穿たれた孔と推測する。時期は、続縄文時代恵山式期と考える。

4.6 若干の考察

今回は、形の歪んだ壺形土器(図4.2)、ごく一般的な鉢形土器(図4.4)、脚の付された皿形土器(図4.6)、典型的な恵山式期の浅鉢形土器(図4.8)の4点を紹介した。いずれも七飯町大中山地区で出土した土器であり、報告書掲載はないものの興味深いものばかりである。大概是「●●畑出土」というラベルが付されているので、およその場所の把握はできるが、図4.8の浅鉢形土器のように蒐集から70年も経過していると、地権者等の把握も困難になり場所の特定が困難な場合もある。それらは今後の課題とするが、蒐集された遺物が表採なのか、掘り出して集めたものなのかは、当時の日誌などが見つからない限り判らないだろう。いずれにせよ、正規の報告書がないだけに学術的価値がやや見劣りしてしまう。土器自体の造形を見る限りでは、器形や文様のなど興味深いものが多いだけに残念なことだ。

しかしながら、図4.2に示した歪んだ壺形土器の文様構成など、特に縄文晩期の土器については、稿を改めて触れる必要があると考えている。この時期の代表的な土器形式である聖山式土器と対比して考えた場合、連繫入組文が主体となる聖山Ⅰ式から、横位連続工字文が主体となるⅡ式へゆるやかに変遷すると定義されているが、図4.2のような三叉文・入組文・工字文(むしろ工字文へ変化する過渡期とも捉えられる)の組み合わせをもつ土器が存在することは、聖山式の型式変遷を考える上でも、検討材料のひとつとなる。

今回紹介できなかった高橋コレクションの中にも、まだまだ検討の余地を与えてくれる土器が存在するため、別の機会に報告したい。

4.7 おわりに

本稿では、高橋コレクションから4点の土器を紹介した。数としては決して多くないものではあったが、今後も継続して高橋コレクションを紹介できればと考えている。

近年、博物館法の改正もあり、デジタルデータの作成と公開が推進される風潮ではあるが、単に写真撮影して発信することが利用者にとって本当に有益なのか、確信を持てずにいる。個人的には、実測図と写真を合わせて整えること

が、コレクションの重要性を再発見することに繋がると思うし、観察を深めることが資料自体を理解する最善の手法と考えている。

なお、今回の土器実測についても、前回と同様に弘前大学人文社会科学部文化創生課程卒業の岩瀬小夜氏にお願いした。いつも突然の依頼に対し、限りがある時間内で成果をあげてくださることに、この場をかりて感謝の意を表したい。



図4.10 四脚付壺形土器(七飯町聖山遺跡出土 下:底部の矢印部分が四脚部)

参考文献

- 七飯町役場 1976「七飯町史」
山田央 2022「聖山式土器に伴う方形区画のある土器について」
『北海道考古学情報』第16号, pp. 8-11

山田 央(七飯町歴史館)